
Los Angeles Wild Ape

お面バイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Los Angeles Wild Ape

【Nコード】

N3825I

【作者名】

お面バイカー

【あらすじ】

これは、過酷なトレーニングにより超人的なパワーを持った、ロサンゼルスのも国籍高校生格闘集団「ワイルドエイプ」の、汗と笑いと涙の青春バトルストーリーである。

P r o l o g u e (前書き)

初投稿です。つたない文章ですが、どうしても書いてみたかった物語でシリーズとして一通り書いてみたいと思ってます。

ほぼ自己満足の産物ではありますが読んでしかも楽しんでいただければ幸いです。批評等ありましたらどうぞ指導ご鞭撻のほどをお願いします。

では、不良どものどたばた青春劇、どうぞ読んでやってください。

Prologue

九月二十八日、月が町を明るく照らす夜七時。Los Angelesのとあるオフィス街に
帰宅途中のサラリーマンがいた。

年は推定三十代前半、茶髪で銀縁の楕円メガネをかけ、ベージュのスーツに身を包んだスレンダーなプロポーション。まさにインテリの代名詞といっても過言ではない。
こぎれいな風体の男性だ。

彼は今機嫌がよかった。冗談半分で同僚とやったポーカーで大勝して懷は暖かかったし、自分が昇進するのもほぼ確定した。おまけに明日から連休なので妻と娘の三人で出かけるという楽しみがあったからだ。

「最近ツイてるな」

彼は思わず鼻歌を口ずさみながらコツコツと靴を鳴らして人波の中メトロに向かって歩いていた。

そのときだった。

後ろから何者かがぶつかってきた。そのままさっさと男の前を早歩きで歩いていき、
突然立ち止まったと思ったら男のほうを振り返ってじっと見つめてきた。

（何だ、失礼なやつだな）

男は不愉快な気持ちになった。ぶつかってきたのもわざとらしく思えたし、ふてぶてしく男を見つめてきているのが馬鹿にされているようだったからだ。

男は呼び止めて説教でもしてやろうと歩み寄った。しかし、そんな気になれなかった。

ぶつかってきた人物は少年だった。年は高校生くらい、無表情で蒼白な顔色。

よれよれの白いシャツにボロボロの黒いスラックスを着用しはだしでたたずんでいた。

無関心なのか自分にしか見えないのか、こんな異様な風体の少年に通行人は誰一人気にもかけていなかった。

その異様さにひるんでいる隙に少年は早歩きで雑踏の中に隠れようとした。

「あ、おい、君！」

男はあわててその少年を追いかけた。なぜ追いかけるのかは本人にもはっきりとは

分らない。少なくとも、不愉快になったので説教してやりたいという気持ちと何より

その少年が何者なのかという好奇心が生まれたからだ。

少年を追ううちにだんだん人気の少ない場所に進んでいた。そうしているうちに少年は

ある路地裏に入ってしまった。

散々追ひ回してる間に男はその路地が行き止まりだということを見て知っていた。

（しめた。もう逃げ場はないぞ）

心の中で勝ち誇った男は勇んで路地裏に入って行った。

しかし、その路地に入った途端男は恐怖に体を凍りつかせた。

行き止まりの路地に少年の姿はない。変わって、目の前には巨大な黒い影が立ち
はだかつていた。

男の倍以上の背丈、ぼろぼろの茶色くくすんだ白い布をかぶっている。

その布の間から鮮血のごとく真っ赤に光る二つの明かり。キリキリ、ガチガチ、ブンブンと正体不明の無機質な音を鳴らしながらゆっくりと男に迫ってくる。

そして、暗がりから銀に光る腕のようなものを伸ばして男にさらに近寄った。

「ひっ」

ぜんまい式のおもちゃのように腕の先端をギリギリきしませて開く。
そして……

「ギヤアアアアア！」

後には男の悲鳴だけがこだました。

九月二十八日、月が町を明るく照らす夜七時ごろのことだった…

ACT1 たった三人の悪ガキチーム

九月二十九日、実家のカナダからこの町に来てはや二週間ほどが過ぎ、人間って変わるんだなと僕、コーダ・ハメットは改めて感心していた。

入学してからまだ十日ほどだけどハチャメチャで、それでもって素敵な仲間（といっても僕を含めて三人だけ）が出来てチームを立ち上げていた。

それまでの引っ込み思案で世間知らずな僕には考えられないことだった。

今お昼休みで僕は学校のカフェテリアに来て二人の仲間を待っている。

もっぱら三人で集まるのはこのカフェテリアなのだが一行に来る気配がない。

おなかもすいているし、仕方なく二人より先にオートミールを一人でほおばっていたら、入り口のほうから仲間が一人来た。

多くの生徒が行きかう中でも一目で分る。

金髪のパイクヘアーにぎらぎらした悪そうな目つき。左腕を覆う黒い龍のタトゥー。パンクファッションにジーンズを羽織った東洋人だ。

「わりーコーダ。遅くなっちゃった」

金髪は息を荒げてサンドウィッチの乗ったトレイを滑らせながら、僕の向かいに飛び込むように座った。

「ああ、気にしないでジャック。あれ？ゴードンはどうしたの？」

オートミールを口に運びながら金髪に返答した。

「あいつはさっきセンコーに呼び出し食らったのを見たから、もーちよい

遅れるんじゃないか？」

後頭部をぼりぼり搔きながらジャックはサンドウィッチをかじり始めた。

「また呼び出されたんだ。今度は何があったのかな？」

悪い思いながらも僕はくすくす笑っていた。

「どーせまた女子更衣室でも覗こうとしたんじゃないの？」

二人でそんな話をして笑っていたそのときだった。

「くうおらあ、誰が覗き魔だあ！」

突然、僕の右後方から重低音の声を響かせながら大男の顔がヌツト伸びてきた。

三本ラインが入ったボーズ頭。ややギョロ目で頬に三本の傷のある四角いあご。

はちきれんばかりの黒いMETARRIKAのTシャツを着たいかついマツチヨマンだ。

「や、やあゴードン。呼び出されてたって聞いたけどどうしたの？」

いきなりの登場で少しドキドキしながら大男に訊ねた。

「夕べ俺様らしき奴がストリートファイトをしてたっつう目撃情報があったらしくてよ、それで尋問されてたんだよ。ったく、何でも俺様のせいにしやがって」

ゴードンはドッカと僕の隣に腰を下ろし、不機嫌そうにミートパイにかぶりついた。

「そーカリカリすんなよ。それよりよ、このニュース知ってっか？」

最後のサンドウィッチ一切れを口に詰めながらジャックは今朝のLAタイムズを取り出した。

その一面には失踪事件の記事が載っていた。

「ああ、最近この町で起こってる連続失踪事件だね？」

「おお、俺様もテレビで見たぞ。怪しい宗教団体の拉致事件じゃないかって言われてるやつだな？」

僕とゴードンは興味津々に新聞を覗いた。

「そうだ。実はよ、この失踪者の中にここの生徒がいるらしいんだよ」

「何い本当か？」

信じがたい情報にゴードンはいぶかしそうに目を細めながらミートパイを食んだ。

「学校で騒ぎにならないように隠してるのかな。それにしてもどこでそんな情報を」

「それは秘密だ。それより、俺が言いてーことが分るか？」

そんなに考え込むほどの答えでもない。半分期待、半分あきれて僕はすぐに答えた。

「あ、さてはそれに関しての依頼が来るってこと？」

「そうか、そいつはいい。いよいよ俺たちワイルドエイプが大暴れできるんだな？」

「おおよ。チームを立ち上げて十日目。やっと俺たちが活躍するチャンスが来たんだ」

ジャックとゴードンは嬉しそうに笑っている。しかし、そんなに都合よく行くだろうか。

「そう簡単に依頼が来るかなあ？」

「そう言うな。オメーも毎日トレーニングじゃ飽きちまうだろ。これはオメーのデビュー戦だ」

すっかり二人は依頼が来るものと決め付けている。しかしデビュー戦って……

「ただの迷子かもしれないんだよ？それに、とっくに警察も動いてるんだから依頼が来る前に事件解決するかもしれないし」

僕はやる気に満ちて暴走しそうな二人を説得しようとした。しかし、

「ぶうあかもん。ここまで失踪してただの迷子なんてことがあるか。拉致してる悪党どもがいるはずだ。そいつらを俺様たち三人でとっちめんだよ」

ゴードンにいたっては拉致集団がいるなどといい始めている。

「よし、依頼が来るだろうし今日はロードワーク終わったらすぐアジトに戻ろうぜ」

「おう、楽しみだぜえ」

ゴードンの言う通り悪い集団が一連の事件に関わっている可能性はあるかもしれない。しかしそうと決まったわけではないのにもうその気になってる。

ああ、すごく不安だ。

午後三時半ごろ。僕らはロードワークで外を走り回っていた。

「気をつけろよ。落ちたら死ぬぜ？」

「どわ!!」

「危ないよゴードン。大丈夫？」

ただのロードワークじゃない。僕らは今細い塀の上を走っているのだ。

とんでもないことにこの後家の屋根を飛びわたり建物の塀を駆け上がったりのだ。

「どーせロードワークやるからにはよりためになるほうがいいだろう。これで

反射神経や集中力も鍛えられるはずだぜ」

ジャックは楽しそうに言いながら先頭を走っている。

ありとあらゆる建物や障害物をよじ登り、飛び移り走り回るフリランニングというスポーツがあると聞いたことがあるけど、それがロードワークになるとは思わなかった。

「でも……こんなところ走って……怒られたりしないかな……」

息を切らしながらジャックに問いかけた。

「大丈夫だ！周りの人間にはメーワクをかけてねー」

ジャックは笑い飛ばしながら僕に向かって叫んだ。まるで公園のアスレチックで遊んでいるかのように見えた。

それにしても本当に迷惑を掛けてないのだろうか。

素っ頓狂なところを走る僕らを見て目を点にする人、珍しがって写真をとる人、腰を抜かす人、仕舞いにはよぼよぼのおばあちゃんが悲鳴を上げてその場で気絶してしまうのも見た。

こんなに人を騒がせて迷惑じゃないはずがない。そろそろ通報されてもおかしくないだろう。

案の定聞こえてきた。ぎらぎらと光る赤と青のパトランプを頭に載せたフォードが僕らの横を併走した。

「こらあ！ またおまえたちかあー！」

このロードワークを始めてからいつも見かける顔だ。助手席から半身を乗り出してわめきたてている。茶色の瞳のたれ目にふさふさの口ひげを蓄えた鉤鼻の警官だ。

「ひええ、ち、違うんですう。これはロードワークで」

「問答無用！ 空き巣どもめ！ 今日こそはお縄にかけてやる。！」

このおまわりさんからはすっかり空き巣と誤解されてしまっている。捕まったらろくでもないことになるぞ。

「デヤハハハハ。マッポのお出ませう！」

「こいつは面白くなってきたぞ！」

ジャックとゴードンはますます楽しそうにしていた。

「二人とも、そんなのんきなこといわないで早く逃げよ」

説教じみた荒い口調で僕は二人に怒鳴り、とある民家の屋根の上で止まって相談した。

「わかったよ。よし、俺がマッポをひきつけよう。コーダは南側から、ゴードンは北側から学校に向かえ」

「OK。ゴードン、遊んで寄り道しないでよ？」

「そう硬えこと言うなよ。うっし、行くぞ」

そういつて僕らは三手に散って走り出した。

「おいマッポのオッサン。そんなにひまならおれが遊んでやんよ。」

ジャックが塀の上からおまわりさんを挑発しはじめた。そのスキに僕とゴードンはそれぞれに走り出す。

しかし一向にサイレンの音が遠ざからない。何で？

不審に思った僕はそつと振り返ってみた。そこにはジャックがひきつけているはずの

フォードが左後方から追ってきていた。足元にじゃれ付く子犬さながらに……

「逃げろコーダ！そいつらハナからオメーに目をつけてやがった！」

ジャックの叫び声が聞こえた。なんてことだ。ターゲットは僕だった。

「ヒヒヒヒヒ。おとなしく降伏しろ！さもないとこれだぞ！」

ゲヒンな笑いを浮かべながら助手席のおまわりさんはおもむろに腰に手を当て、物騒な鉄の塊を僕に向けだした。学生相手にここまでするか！？

「ひえええええええー！ー！」

無我夢中で駆け出した。住宅の屋根を飛び移り、幅十センチほどの塀の上を全力疾走で走り抜けた。

後ろからはフォードが狂ったようにパトランプをぎらつかせながら唸りをあげて追いかけてきた。今にも飛び掛りそうな勢いだ。

いや、本当に飛び掛ってきた。助手席のおまわりさんがいつの間

にか僕の真後ろに着地して立ち上がろうとしていた。

「ふうう。貴様ら空き巢の一人を、ついに、やっと、とうとう追い詰めたぞ。無駄な抵抗はやめろ。私は毎朝出勤前に二十キロのランニングをしているほどの健脚だぞ」

おまわりさんは物騒な鉄の塊をしっかりと構えて近寄ってきた。血走った目をカッと見開き、顔中汗をたらし、はあはあとあえぎながら舌なめずりをしつつ気色悪い笑みを浮かべている。

一瞬全身の血の気が引いた。こんな狂ったおまわりさんに捕まったら最悪殺される。

僕は恐怖で立ち止まってしまい後ずさりしたがそのとき、おまわりさんの言った追い詰めたの意味がようやく分った。

気がついたら塀の縁にきてしまっていた。後ろから僕を助けようと追いかけていたジャックもいつの間にかはぐれて見当たらなかった。近くに飛び移れそうな屋根も塀もない。

飛び降りても弾除けに出来そうな障害物は見当たらない。あるのは粗末な街路樹だけ。

しかもそのふもとはには巨大なブルドックが一頭気持ちよさそうに昼寝をしている。

撃たれるか捕まるか、それともブルに噛まれるか。万事休す。

しかしそのときだった。

「キャー！！覗きー！」

左方から悲鳴が聞こえた。僕のいる位置からでは街路樹が遮って何があるのかは見えないけど、どうやら二階の窓辺で着替え中の女性がいたらしい。

「い！？ち、違うんです！これは、あの、その」

おまわりさんは両手を広げて必死に弁解している。

しかし、危ない表情でこんな塀の上に突っ立って、しかも物騒なものを構えていたら

誰だって変態と誤解するだろう。もはや弁解の余地はなかった。

「こんの変態！」

次々と左方から女性の投擲攻撃がおまわりさんを襲う。目覚まし時計や化粧品、中には鋏なんて危ないものまで飛んできた。

僕はあっけにとられて目を点にしながらその光景を見ていた。よくコメディーで見る光景だけど現実でもこんなことが起こると思わなかった。

こんな状況じゃなければ僕は腹を抱えて笑い転げていただろう。

「アヴぁー！ー！」

女性の猛攻に耐え切れずおまわりさんは昼寝しているブルドッグの真上に墜落した。

「はっ！ いけない。今のうちだ！」

おまわりさんがブルドッグと追いかけてっことをしている隙に僕は一目散に逃げ出した。

夕方五時、ようやく学校に戻ってきた。さっきの追いかけてっこでもうへとへとだ。

「ロードワークだけでこんな時間になっちゃった。あの二人はもう帰ってきてるかな？」

そんなことを考えながらふらふらと校内のアジトに向かっていたらジャックが塀の上から飛び降りてきた。

「よー、無事だったか？」

ジャックもへとへとのような様子だ。汗ぐっしりで息を荒げている。

「うん、何とかね。おねーさんとブルに助けられた」

「何のことだ？ まあ無事でよかったぜ」

「さ、アジトに行こう。ゴードンがもう帰ってきてるんじゃないかな？」

二人でさっきのおまわりさんの馬鹿な話をしながらアジトに向かった。

「まあオメーのいうとおり、これからのロードワークはまともな道をするようにするか。お、ゴードンの奴、寄り道せずに戻ってるみてーだな？」

そのようだった。アジトに明かりが灯り、人の気配がする。

しかし、ゴードンの気配ではなかった。

窓から見える人影、日も落ちてきて薄暗かったので黒い影しか見えなかったが、ゴードンではない。もっと小柄な人物だった。

誰だろう？ 得たいが知れなく僕は軽く戦慄した。

「なんだ？ 風紀委員がアジトをかぎつけやがったか？」

そういつてジャックは入り口に向かってずんずんと歩を進めた。そして、乱暴にドアを開けて一括した。

「やいコラ！ どのどいつだ俺たちのアジトを荒らすやつあ！」

そこにいたのは女の子だった。

うつすらと青みがかった黒髪のポニーテール。まん丸の銀縁メガネを掛けたおちよぼ口の童顔。紺色のプリーツスカートをはいっている。

ジャックがいきなり入ってきたからか、驚いてその場で石化したように固まって冷や汗をたらしていた。おびえた様子はないようだ。

僕は彼女を見たことがあった。

確か、隣のクラスでイギリス出身の一年にして、風紀委員になった秀才だとか噂になってるスミスさんだ。

「あ、あんたたちがワイルドエイプね？」

スミスさんは気を持ち直して僕らに問いかけた。

「んだあ、オメーは。俺たちが格闘集団ワイルドエイプだ。文句あつか？」

顔を赤らめながらジャックはスミスさんに言った。まだいきり立ってるようだ。

冷静さを欠いているジャックより僕が話を聞いたほうがよさそうだな。

「落ち着いてジャック。ここは僕が話すよ」

「お、おう」

僕はジャックをなだめて一步後ろに下がらせた。

「はい、僕らが格闘集団ワイルドエイプです。あのー、僕らに何

かご用でしようか？」

不安になりながらも僕はなるべくやんわりと、下手に出てたずねた。

アジトからの立ち退きを命じるつもりだと思ったからだ。使われてないとはいえ学校のボクシングジムを勝手にアジトとして使ってるところに、風紀委員がくるといったらその確率が高いだろう。

しかし、その見当は大きく外れた。

「あんたたちに頼みがあるの。お願い、いなくなった私の兄を探して！」

なんと依頼だったのだ。しかも僕らのチームに対する初めての依頼だ。

僕とジャックはきよとんとして、黙ってお互いに顔を見合わせた。

ACT 2 遭遇

夕方五時半ごろ、ススマミレになったゴードンがようやくアジトに戻ってきた。

げらげら笑いながらタオルで顔をぬぐっていった。

「戻ったぞ。いや、わりいな。帰り道に火事の家から人を助けだしててよ

……てあれ？」

そのとき、僕とジャックは難しい顔をしてテーブル上の地図をにらんでいた。熱心に地図上にマークをつけているのでゴードンに気づいていない。

「一体どうした？」

声を掛けられてようやく僕とジャックはゴードンの存在に気づいた。

「よーゴードン。遅かったじゃねーか。どこで油売ってたよ？」

「おいおい人の話を聞けよな」

向き直ってジャックは待ちわびたようにいったのを聞いて、ゴードンはけしからんとばかりに苦い顔をした。

「まあまあ、そんなことよりゴードン大変だよ。僕らに初依頼だ」

言葉をさえぎって重要事項を報告したら、さっきの苦い顔はどこへやら。

ゴードンはたちまち目を輝かせた。

「ほほう、ついに来たか。んで、昼間に言っただあの事件のことだったか？」

「そうなんだがそんなに面白そうじゃねーよ」

ジャックが不機嫌そうにぼやいた。

「ぶうあかもん！俺様たちは弱きを助け、強きを求める格闘集団だぞ！困った人を助けるならそんなこと言うんじゃないぞ！」

ゴードンはテーブルを乱暴に叩きジャックに一括した。すかさず僕はジャックをフォローした。

「それがただの依頼じゃないんだよ。実はね……」

僕とジャックは一時間ほど前のことを説明した。

時をさかのぼって一時間前。アジトにて僕とジャックはスミスさんと

向かい合って話しをしていた。

「お兄さんって、最近増えてる失踪者の一人？」

僕はスミスさんに尋ねた。

「ええ、そうなの。なかなか鋭いじゃない」

僕とジャックはまたお互いに顔を見合わせてきよとした。

「……そういうことならもう警察が動いてんじゃねーか。それなのにあんたみてーな優等生が俺らのような不良の溜まり場に来るなんて、よほどのことでも

ねーとありえねーぞ？何かたくらんでねーか？」

ジャックが疑わしそうに眉をひそめてスミスさんにいった。

「そんなんじゃないわ。お願いよ。生徒会と掛け合って報酬も用意したんだから」

彼女は困ったような表情を浮かべていった。

「ちょ、ちょっと待って。僕らは報酬なんか受け取らないよ」

報酬という言葉に思わず大声を出した。それと同時にジャックも続けて言った。

「そうだ、見損なってもらっちゃー困る。俺達は義賊だぜ。そんな見返り

目当てに依頼は受けてねーよ」

しかし、スミスさんは意味ありげににやりと微笑を浮かべながら続けて言った。

「あら、あなたたちにとってなくちゃ困るものよ？」

スミスさんの銀縁丸メガネが不気味に光る。いぶかしそうにジャックが質問した。

「そりゃどんな報酬だ？」

「報酬はこのジムの使用权よ」

ジムの使用权。たしかにこの学校の事務を勝手にアジトにしてるけど、

その権利とは。

「この報酬はあなたたちにも都合いいはずよ？」

「このアマ！やっぱり悪いことをたくらんでやがった！依頼を断ったときにや

俺たちをここから追い出すハラだったな！？」

半ば卑劣とも捕らえられるこの依頼報酬にジャックは憤怒したが、あわてて僕が会話に割ってはいった。

「分かりましたスミスさん。引き受けましょう！」

「ありがとう。それと、私のことはシャーロットでいいわ」

スミスさんもといシャーロットは笑顔で言った。

時は戻って現在。事情を聞いたゴードンは大口を開けて笑った。

「デヤハハハ、そいつは一本取られたな」

「よかねーよ！コーダ！なんであんな性悪女の依頼なんて受けちゃったんだ！」

ジャックは忌々しそうに眉間にしわを寄せながら僕に詰め寄った。

「だって初めての依頼だよ。それに、受けなかったらばくらここでトレーニングとか出来なくなるじゃないか。僕そんなのいやだよ」

それを聞いた後ジャックはぶすつと膨れたままテーブル上の地図に向き直った。

「まあ受けちゃったモンはしょうがねえぜ。それより、何か手がかりはあるのか？」

ゴードンは慰めるつもりでジャックの肩を平手でたたきながら僕らに聞いた。

「そのお兄さんの写真はもらったよ。はいこれ」

行方不明になったシャーロットのお兄さんが写った写真をゴードンに渡した。

やや青みがかった黒髪の整ったショートストレートヘア。丸みを帯びた逆

三角型の銀縁メガネ。細くしまった低いが長い鼻。白いシャツを着用している

物静かそうな男が写っている。

「名前はエリオット。最後に見たときはそのシャツに黒いスラックスを

はいてたんだって」

「華奢なガタイだな。タツパはどのくらいだ」

ゴードンは首をかしげて写真を見つめた。

「確か、173cmって言ってたよ」

「ジャックと同じぐらいか。しかしなんとも目立った特長のねえターゲットだな」

ゴードンはさらに難しい顔をした。

「何でも四日前の夕方ごろに、図書館に行くって出かけたきり帰ってこなかった

らしい。特に変わったところとかは無かったって言ってた」

「ほほお。他には？」

「彼女からの情報はそれだけ。ほかに有力な情報が無くてね」

困った表情を浮かべながら僕はジャックと地図に向き直った。

「ん？それにしては熱心にマークをつけてんじゃねえか。こりや一体なんだ？」

テーブルに近づいてゴードンが地図をまじまじと見つめて質問した。

「ああ、それは依頼人の家や図書館の位置だ。あとはここ最近起きた失踪事件のマーク」

気を取り直したジャックが手に持ったメモと地図をにらみながらいった。

「何？何でそんな失踪した場所なんてえのがわかんんだ？」

「そりゃ俺が調べた最後の目撃情報の位置だ。どーやって調べたかは聞くな」

ジャックがそう話しているうちに僕は最後のマークを地図に書いた。

「ジャック、出来たよ」

「お、出来たか。どれどれ……」

僕らはテーブルを囲んで橙色の電気に照らされた地図を覗き込んだ。

「ははあ、これで他の失踪事件との共通点を探そうって考えだな？」

ゴードンがちらりと目線を上に上げて僕らに聞いた。

「そうなんだけど。うーん、そんな簡単に手がかりを見つけられるかなあ？」

僕は首をかしげながら難しい顔をした。まじまじと見つめて分ることといえば

最後の目撃情報は夜七時前後で、場所は人通りが少ないところというくらい。

他には目立った共通点や情報は無いようだ。ゴードンが眉をひそめていった。

「そもそもなんだって失踪者は人気のないところに行ってた？新聞でも見たが、

どいつもこいつもそんなところに近づくようなやくざ者には見えなかったぞ」

「だろ？そこが一番クセーんだよな」

ジャックが壁にかけてある青いライダーズジーンズを取り羽織った。

「多分失踪者は、何かに釣られて人気のないほうへ行ったんじゃない

ねーかと思う」

黒のレザーグローブをはめるジャックに僕は質問した。

「でも何に釣られたの？それに、エリオットさんの場合も同じだったかな？」

ジャケットの襟を直しながらジャックは返答した。

「それはこれから調べに行く。もうすぐ夜七時だ。これくらいの夜に

街中をうろつけば、何か手がかりを見つけられるかもしれない」

そう話していたところに、いつの間にか出かける準備を済ませたゴードンが

ヌツと出て来た。赤いバンダナを巻いて黒い革ジャンを着た、いかにも陽気な

アメリカンライダーらしいファッションだ。

「よっしゃ、それなら早速町に繰り出そうぜい。ジャック、コード。出発だ！」

二人を見て僕はあわてて壁に駆け寄り、白いレザージャケットを引つつかみ

羽織り始めた。

「ちよ、まってよ。僕まだ準備してないってば」

こうして、僕らは手がかりを探すために町に向かうことになった。危険な目に会わなければいいけど……。

夜六時。僕はダウンタウンの大通りを暴風のごとく爆走していた。

「Y E E E H A A A A A A A !」

ゴードンの駆るハーレー・ダヴィッドソンが怪獣の咆哮のごとく排気音をかき鳴らし、ヘッドライトをぎらつかせながら爆走する。サイドカーに乗っている僕は右へ左へ大きく振られて酔っていた。これ以上続くと胃の中身がリバーシそうだ。

激しく振動するサイドカーからゴードンに向かって叫んだ。

「ゴードン！ 走りに夢中になって目的忘れないでよ！」

「そうあせるな！ そろそろ止まるぜい！」

右前方見えるパーキングメーターにゴードンはバイクを止めた。一つ先のパーキングにはすでにジャックのバイクが停まっていた。

「遅せーぞ！ オメーそれでもリッタークラスのバイクか！」

馬鹿にしたように笑いながらゴードンに言った。

「デヤハハハそういうな」

「まあいいや。ところでコード、どうしたんだ？やけに顔色がワリーが」

ジャックが目を丸くして僕の表情を見つめた。

「気にしないで。降りて少しは楽になったから」

深呼吸をして僕は落ち着こうとした。

「さて、どうする？」

腕を頭上に伸ばしてストレッチをしながらゴードンは僕らに聞いた。

ジャックが周囲を見回しながら言った。

「手分けして探すぞ。そのほうが手がかりを引っ掛けやすいと思うぜ」

「賛成。だけど、危なそうだったら深追いしないでよ」

僕も屈伸しながら二人に注意した。それに答えて大丈夫だとばかりにニカッと笑った後、ゴードンの一声があがった。

「よっしゃ、何かあったらすぐ連絡だ。野郎共、ぬかるんじやあねえぞ！」

「任せろい！」

「OK！」

三人で突き出した拳を軽く打ち合わせた。僕らはそれぞれ違う方向に歩き、夜のネオン街の中に溶けていった。

ダウンタウンのオフィス街は今夜も明るかった。ビルの照明やネオンが

宝石のように輝き、満月がスポットライトのように夜空を明るく照らすのも相まって

視界は昼間と大差ないくらい良好だ。道行く人々が忙しく往来する中で僕は

一人一人の顔をなめ回すように観察し、怪しい人物や手がかりを探した。

そんなことをしているものだからしばしば道行く人に変な顔で見られたり、強面の
人に危うく絡まれそうになったりもした。

こんな風に捜査が続いているうちにだんだん眠くなってきた。

やはり手がかりなんてそう簡単に見つかるものでもない。今夜は収獲なしかな。

もうすぐ七時だ。何も起こりそうな気配もないし、一旦みんなと合流しよう

考えた僕は、ズボンのポケットから携帯を引っばろうとした。

そのとき、わざとらしく僕の左肩にぶつかってきたものがあった。

（いけない、こんな道の真ん中に突っ立ってたから誰かにぶつかったかな？）

けっこう強くぶつかられて、前のめりに倒れた僕は前を見上げた。

そこにはあの男が立っていた。

やや青みがかった黒髪のショートストレートヘア。細くしまつた低いが長い鼻。

よれよれになった白いシャツを着用している容姿端麗で物静かな男。

紛れも無い写真で見た男、エリオットがそこに立っていた。

思わずアツといいかけた口が閉まらず、僕はその場でぽかんと口を開けて

エリオットを見つめた。

しかし、僕はエリオットの異様さにひるんで声を掛ける気になれなかった。

まるで人形のような。見つめてくる目は瞳孔が開ききり、蒼白な表情からは生気を

感じない。髪は乱れ服もぼろぼろだ。靴も履かず泥だらけになった素足を地に

付けている。わざわざぶつかってきて何も反応を示さない。わざとかどうかは

おいとしても、人にぶつかったら普通は何かしらのリアクションは起こすものだ。

しかし、彼はぴくりとも動かなかった。

そうしているうちに、エリオットはさっと後ろを向き雑踏の中へ消えようとした。

「あ、ちょっと待って！」

思わず僕は大声を上げてエリオットを追った。人ごみの間をすするとすり抜けて

人気のない方へと進んでいった。

（せっかく見つけたんだ。見失ってなるもんか！）

そう思い僕はエリオットを追い掛け回した。

気がついたらほとんど人気のない路地に来ていた。スラムほどではないがさびれた

赤レンガの建物がずらりと並び、壁際に年季の入ったダストシュート、壁には

スプレーの落書きやポスターが貼られた跡らしい紙くずがへばりつく、まさに

アウトローの言葉がぴったりの場所だ。

あまり立ち寄りたくないような場所だが、僕はエリオットを追いかけるのに夢中に

なる余り、そんなことはほとんど考えもしなかった。

エリオットが数メートル先の横道に入っていくのが見えた。

（あそこか！よし）

勇んで僕は横道に入った。

しかし、横道の先には恐怖が待ち構えていた。

そこにいるはずのエリオットが、どういうわけか巨大な黒い影にすり替わって
いたのだ。

どうやら四足歩行の動物らしい。外観を見た限りはゴリラの体躯そっくりだった。

身の丈数メートルのなぞの巨体はぼろぼろの汚れた布をかぶり、機関車のごとく
猛烈な鼻息をふかす。目と思われる真っ赤な光が、布切れの間から
ぎらぎらと僕を
見下ろしていた。

「な、なにこれ……」

余りの恐怖で混乱したらしく、僕は引きつった笑みを震わせながら恐怖で冷や汗と
涙を流した。いまさらながら後悔した。

（ああ、一人で後を追うんじゃないかった。さっき言われたばかりなのに、二人に
連絡するのを忘れるなんて）

その場で回れ右をした僕は一目散に逃げ出した。しかし、後をつけるのに夢中になっ
ていた僕は、この辺の裏路地がどういう地理になっているのか分らず、適当に
走り抜けるほかに手立てが無い。右へ、左へ、時には直進。あらん限りの力を

絞って走った。

あの巨体は追ってきているだろうか？

走りながら後ろを振り返るとそこには、猛牛さながらに四足歩行で突進してくる

黒い影が！鈍重そうに見えがその巨体は、力強く地を蹴ってその見かけからは

想像がつかないほどのスピードで走っていた。

「うわあああああああ！」

思わず悲鳴を上げてしまった。最初見たときはゴリラか何か猛獣だと思ったけれど

そうではないらしい。体中から蒸気を噴射し、何か金属がきしむような音を

発している。明らかに自然物ではない。

いや、そういう分析は後にして、今は逃げることを優先しよう。そう考えつつ前を向き直ったら……

何てことだ、行き止まりに突き当たってしまった！

塀は高くよじ登れそうにもないし、はしごも無い。周りを見渡しても逃げ場は

なさそうだ。行き止まりに背を向け、来た道を見るとなぞの巨体が追いついてしまっていた。

そして、銀に光る腕のようなものを伸ばして先端を僕に突きつけ

てきた。

きっと僕を殺す気だ。後ずさりして背中を壁につける。

なぞの巨体はぜんまい式のおもちゃのように腕の先端をギリギリきしませて

開いてきた。

もうだめだ。目をつぶりこれまでの人生の走馬灯を眺め一筋の涙を流した。

(短い人生だった。父さん、母さん、姉さん、先立つ勝手をお許しください。

アーメン……)

すべてを諦め安らかな表情になっているそのときだった！

「うおらあああああああ！」

怒りの雄たけびとともに巨体をとび蹴りで派手に吹き飛ばした影が一つ。

そこにはジャックが立っていた。

「じ、ジャック。何でここが分ったの!？」

うれしさ半分、恐怖半分で震えながらも僕はジャックにかけより声を掛けた。

「心配だったからずっとオメーの見える位置にいたんだよ。そして、何を見たのか
いきなり人気のない方向へ向かい始めたからよ。まったく、やっぱ
テメーで言っ
ておいてテメーが深追いしてやがったぜ」

説教してきたもののジャックは安心したようなそぶりだ。
僕もジャックが来たおかげで少しづつ落ち着きを取り戻してきた。

「見たところ、アレが失踪事件の手がかりクセーが」

のそりと起き上がってくるなぞの巨体をにらんでジャックが言った。
た。

「そうなんだ。実はダウンタウンでエリオットを見かけてここま
で追ってきたんだ。」

そしたらあんな化け物と出会っちゃって」

「なに、あの写真のヤツがいたのか!？」

目を大きく開いて驚きながらジャックは、冷や汗と涙をぬぐう僕
のほうに
首を向けた。

そこへ僕らの会話を邪魔するように荒々しい蒸気が吹いてきた。
起き上がってきたなぞの巨体はかぶっていた布切れが取れてその姿
を現した。

それは巨大なフランケンシュタインのようなものだった。

あちこちに鉄板や機械が貼り付けられたつぎはぎだらけの灰青色の肌。真紅の目に鼻が無く口が耳元まで裂けたのっぺりとした人相。筋肉は岩石のように隆起し、機械からは時々蒸気が吹き出していた。背にアンテナの生えたエンジンのようなものを背負っている。

「うへー、ホラー映画に出てきそうな奴だな。いや、どっちかつーとSFか？」

ジャックは不敵な笑みを浮かべている。

「どうしよう？」

「決まってるじゃねーか。あのフランケンゴリラとっ捕まえて洗いざらい調べるんだ」

ジャックのことだから無茶を言うとは思ってたけれど案の定だ。

「でもあんなものどうやって捕まえる気？素手じゃ無理だよ」

そんなことを言ったらジャックはさらに不敵な笑みを浮かべた。

「へへ、こんなこともあるーかと持ってきた」

懷から取り出したものを僕に投げ渡した。それはロープだった。金属が編みこまれているのかずっしりと重くざらざらとした触り心地。触ってみただけでも並大抵では千切れない丈夫なものだというのは十分分った。

「俺がやつをすっ転ばせる。そしたら奴をそいつでテキトーにし
ばれ」

ジャックはおもむろにグローブをはめなおして僕に言った

「うう、怖い」

フランケンが勢いよく蒸気を吹いているのを見て怖気づいた。

「心配すんな。俺がついてるからよ」

しかし、そう言っていた矢先にフランケンゴリラは背を向けて走り出した。

「あ。ヤロー、待ちやがれ！」

僕とジャックはフランケンの後を追った。ここにきてなぜ逃げ
かが気になった。

渡されたロープをジャケットに突っ込みながら僕はジャックに言
った。

「どうしたんだろ？さっきまで僕を追い掛け回したのに」

「さあな、それよりこの先は行き止まりだ。そこでとっ捕まえんぞ
！」

ジャックのいったとおりだった。フランケンは行き止まりに突き
当たっていた。

しかし、ただの行き止まりじゃない。その奥にはエリオットがい

たのだ。

「ジャック、あの人だ！あれがエリオットさんだ！」

「おお、あいつか！よっしゃー！」

ジャックはさらに加速してフランケンとエリオットめがけて飛びかかった！

その瞬間、エリオットが何かを小声でつぶやいた。途端、それに反応したようにフランケンが動き出し、エリオットを右腕に抱えて空高くジャンプした。

「なっ……」

飛び掛り損ねて両足で踏ん張りながらスライディングしたジャックの頭上を、

フランケンは建物の屋根を飛びわたって夜の闇へと消えていった。

「と、飛んだ……」

僕はあっけに取られて上を見上げていた。

「チクショー、逃がしちゃった」

ジャックが地団太を踏んで上を見上げていた所へ僕は駆け寄った。

「大丈夫？」

「俺は心配いらん。それより、あのゴリラは何だったんだ？エリ

オットと

仲がよさそうだったが」

二人でいろいろなことを考え話していたそのとき、突然後ろからまばゆい光が差し込んできた！

誰が通報したのか、僕は警察に包囲されていた。行き止まりをふさぐようにパトカーが数台けたたましくサイレンを響かせ、そこから数人の警官が拳銃を僕らに向けていた。

「警察だ！両手を頭の後ろで組んでその場に伏せろお！」

サーチライトに照らされた僕とジャックは石化したようにその場で固まった。

「さらにチクショーだな」

忌々しそうに歯軋りをするジャックに僕はこわばりながらもそつとささやいた。

「ジャック、だめだよ。これ以上騒ぎを起こしちゃ」

「……しかたねー」

僕は言うとおりにして警察に連行されることとなった。一人どこににいるか分らないゴードンを残して……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825i/>

Los Angeles Wild Ape

2010年10月14日02時26分発行